

## 巻頭言 「カール・バルトの神学」

宇野 元

先年、訳書『翼をもつ言葉』について、教会でお話しする機会を与えられた時のこと。著者ウィリモンの念頭にあった読者は、毎週、説教を務めとする牧師たち。週日に設けられた集まりも、もっぱら牧師の集いになるだろうと予想していました。そして忙しい牧師たちが何人集まるだろうかと。ところが、11名の小さな集まりの中に信徒が3名参加されました。思いがけないことに喜びが湧きました。拙い話ののちのランチをはさんでの懇談会では、どうしても牧師たちの会話になりがちで、信徒の方たちへの配慮が行き届かず、申し訳ない気持ちが残りましたが……

集いの翌日に思いました。話の内容はともかく、カール・バルトに関わる集会にたいそうふさわしかったと。バルトの講義には、神学部の学生や牧師にまじって、いつも信徒が参加していたからです。

バルトの言葉は「易しい」とは言えないかもしれませんが、神学の専門家でなくても理解できるものです。また反対に、神学を学んだ人であればよくわかるというものでもありません。

聖書と、教会の過去の神学を真剣に受けとめる彼の取り組みは、神の言葉と信仰の確かさを問う心に語りかけてくれます。たえず試練に見舞われる私たちに励まし、勇気づけてくれます。ここに彼の特色があります。改革派の神学者でありながら教派の垣根を超える所以もこの点にあると思います。大きな広がりの中に置かれるとき、いろいろな所に、確実に読者が与えられる書き手であるといえるでしょう。

印象深いエピソードがあります。バルトが刑務所のチャプレンたちと対話した時のこと。集会の終わりに、信徒の女性が感謝を述べつつ、バルトの一冊の本との出会いを喜んで紹介し、その一部を朗読しました。それは「東ドイツの牧師への手紙」(1958年)という小冊子でした。一見、信徒には関係がないかのようなタイトルの本の中に、その人は味わいある言葉を得ていたのです。

「いったいだれが支配しているのか？ 恵みと憐れみに富む神は、たとえお怒りになり、打ちたたかれることがあっても、そしてそのような場合にはなおさら、人を滅ぼしたいと思っておられるのではない。すべての人が——キリスト者たちが、そして人間全体が——救われ、真理を知るよう願っておられる。神が裁かれるのは、まさに愛そうとしておられるからです。祝福しようとしておられるからです。」